

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想
 - 2-1：近代の知的状況における宗教思想
 - 2-2：批判哲学から批判的実在論へ
 - 2-3：シュライアマハーの宗教哲学
 - 2-4：ティリッヒの宗教哲学
 - 2-5：波多野精一の宗教哲学
 - 1：波多野宗教哲学と実在論 7/1
 - 2：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/8
 - 2-6：ヒックと批判的実在論 7/15
 - 2-7：言語から宗教的実在へ
 - 1：リクールと解釈学的プロセス 7/22
 - 2：イエスの譬えの読解プロセス 7/29
 - 2-8：言語論と宗教哲学 10/7
 - 2-9：次元論と宗教哲学 10/14

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境**<前回>ティリッヒの象徴論****(1) 宗教的象徴の問題圏**

1. 広義の宗教と狭義の宗教（可能性と現実性）
現実化の素材としての宗教的象徴
2. 狭義の宗教と世俗領域との関係 → 多義性、隠喩
バーク：ロゴロジー、世俗から宗教へ、宗教から世俗へ
3. 宗教経験・宗教的象徴・概念体系：メッセージの表現形態としての象徴
4. 生と意味（リクール）／形態と概念（儀礼と神話）
解釈学と力学
5. 象徴・宗教的象徴と人間的現実との関わり
人間的実在は象徴によって構成される。
6. 意味の形而上学：意味意識の現象学、認識の現象学
認識行為→行為（志向性）と対象（志向されるもの）
思惟／存在／精神 → 学の体系
意味連関（とその指示対象としての世界）と意味根拠(Grund / Abgrund)
形式(Sinnform) 内実(Sinngehalt)
Das Unbedingte

(2) ティリッヒの象徴論

1920年代：意味の形而上学→1950年代：基礎的存在論
志向性(Richtung) 関心(concern)

< Das religiöse Symbol(1928), MW.vol.4 >

7. 象徴一般(Symbol überhaupt)の4つのメルクマール
非本来性／具体的直観性／内在的力動性／承認性
8. 意味と指示
非本来性：多義性 ← 宗教（狭義）と世俗の動的連関

哲学的象徴論

意味連関の多重性 (=世界の多元性)

人間精神の諸領域における形式的原理

9. 生と意味

具体的直観性、内在的力動性 → 象徴の美的あるいは心理的次元

文化の神学 (芸術の神学) の文脈 → 実在論

10. 宗教の社会性と象徴

われとわれわれの弁証法 → 承認性

宗教社会主義の文脈

11. 宗教的象徴、宗教と文化

「宗教とは無制約的なものへ向かう志向性であり、文化は制約的な意味の諸形式へとその統一性に向かう志向性である。」

「無制約的なもの自体は決して対象とはならず、無制約のものがそこで直観される象徴だけが可能なのである。信仰は制約的なものから取り出された象徴を通して無制約的なものへ向かう志向性である。」

< Dynamics of Faith (1957), MW.vol.5 >

12. 指示性 (point beyond themselves to) : 記号としての象徴

参与性 (participation) : 記号一般との差異

開示性 (open up) : 心理的実在、内と外の相関 → 自己同一性、自己の統合性

美的実在とその経験

無意識性 (the individual or collective unconscious dimension) :

社会的機能 (政治的、宗教的)

非恣意性 (cannot be invented) :

個人による恣意的意図的行為によって象徴は生じない。

↓

存在論的概念枠 : 参与・開示

13. 宗教的象徴

14. テイリッヒの象徴論の特徴と問題点

・包括的な議論 → マクロな構図において優れている。基本的な方向性は明確。

・細部の曖昧さ → 理論の再構築の必要性。

15. キリスト教思想史、特に神学における諸理論との相互連関・比較という課題

2-4 : テイリッヒの宗教哲学

3 : テイリッヒの神話論

—シェリング、カッシーラー、ブルトマン

(1) ブルトマン—神話・神話論・世界観・科学

0. ブルトマンの実存論的神学の構図 (参考資料<ブルトマン>より)

1) 信仰と世界観との区別・相違

主体的決断と客体化・対象化 (偶像・支配の欲望) ←キルケゴールのモチーフ

・聴く (聴従、Gehorsam) :

神の語りかけ → 説教 → 決断 : 現在の出来事 (言葉の出来事)

現在の終末

神の本質的な非対象性

・見る : 世界像・世界観

2) 世界像・世界観

S. Ashina

古代（黙示的、グノーシス主義的）／現代（科学的）
 信仰とは世界像からの自由・解放である。

3) 聖書における神話論と非神話論化

聖書においては宣教(Kerygma)のメッセージを表現するために、先行する宗教的
 伝統（古い神話）から様々な表象が受け継がれ、神話的表現が行われる。しかし、
 パウロとヨハネにおいて、すでに神の客体化・対象化の克服が行われている。

パウロ：肉によるキリスト

ヨハネ：「しるし」批判

4) 現代人の世界観としての科学的世界観

聖書的世界観（古代の世界観）の強制は、知性の犠牲である。

ブルトマンの近代性

5) 神話論からの脱却としての非神話論化

神話が表現しようとする本来意図している信仰（実存的自己理解）を取り出すこと。
 その方法としての、実存的解釈。

ここで、ブルトマンはハイデッガーを参照する。

↓

神話という語り方の承認と、その客体化（神話論化）の拒否

非神話化ではなく、非神話論化 (Entmythologisierung)。

非神話化は誤訳か？ あるいは、ブルトマンの曖昧さか？

(2) テイリッヒの神話論

1. テイリッヒによる神話論の概要

die *negativen Theorien* des M. bestreiten dem M. einen selbstständigen Gehalt. (229)

die *positiven Theorien* des M. sprechen den mythischen Schöpfungen eine selbständige
 sachliche Bedeutung zu. (230)

消極的な理論：還元主義的な神話論、神話を社会的心理的な作用・領域へ還元する。

寓意的な諸理論(die *allegorische*)、心理学的な諸理論

積極的な理論：神話自体の論理構造から神話を論じる。

シェリング（象徴的、現実主義的な理論）die *bedeutungsvollste metaphysische Theorie*

カッシーラー（認識論的理論）die *erkenntnistheoretische Theorie*

2. 批判哲学→文化の哲学へ

Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress,
 1993.

Immanuel Kant formalized and ordered this critical view: the manifold of experience is shaped
 originally by the forms of intuition (space and time), and it is unified and ordered by the
 categories of understanding (causality and substance). Thus the entire manifold of experience
 possesses its universal order, ... modern "empirical" physical science in this way becomes
 possible. Nevertheless, that world of ordered sequences governed by necessary law is only the
phenomenal world, a construct by human sense and by the human mind out of the given. ... not
 the "real" world, the "thing in itself" or *noumenon* ... Critical philosophy did not completely
 sunder scientific knowledge and "reality," but it surely distinguished them --- and led many to
 think that the naive realism of pre-Kantian philosophy was at an end. (61)

↓

超越論的觀念論

波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」(1920)：波多野宗教哲学の原型・原構想

「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」(200)「うと欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粹理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるといえることができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」(201)

↓

カッシーラーの「象徴形式の哲学」

3. カッシーラーの象徴形式の哲学における神話論

Er schreibt dem M. eine eigene innere Sachhaftigkeit zu, die sich in dem gesetzmäßigen, sinnvollen Aufbau der mythischen Welt ausprägt. Der M. ist wie Wissenschaft, Kunst, Sprache ein notwendiges Element des Geisteslebens. Seine Realität beruht ebensowenig wie die Realität jener Sinngebiete auf den Schaffen einer in sich sinnvollen geistigen Welt. (230)

4. シェリングの実在論

Er (Schelling) sieht in ihm den Ausdruck eines wirklichen theogonischen Prozesses, d. h. eines Prozesses, in dem sich die in Gott geeinten Prinzipien widerspruchsvoll im menschlichen Bewußtsein durchsetzen. Von hier aus gibt er eine umfassende realistische Mythendeutung. (230)

↓

批判哲学＋実在論 → 批判的実在論、超越的実在論
die *symbolisch-realistische* Theorie

5. Ernst Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen. Zweiter Teil. Das mythische Denken*, 1925, (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977)

Seine "Objektivität" ist nicht dinglich, sondern funktionell zu bestimmen: sie liegt weder in einem metaphysischen, noch in einem empirisch-psychologischen Sein, das hinter ihm steht, sondern in dem, was er selbst ist und leistet, in der Art und Form der Objektivierung, die er vollzieht. (18-19)

Dieses Ganze birgt eine eigene innere "Wahrheit" in sich, sofern es einen der Wege bezeichnet, auf dem die Menschheit zu ihrem spezifischen Selbstbewußtsein und zu ihren spezifischen Objektbewußtsein vorgedrungen ist. (22)

Aber wir verlassen diese allgemeinen Betrachtungen, die dazu bestimmt waren, den Ort, den der Mythos im System der geistigen Formen einnimmt, vorläufig zu bezeichnen und zu umgrenzen, um nunmehr die Besonderheit des mythischen Begriffs der "Realität" und des eigentlichen mythischen Objektivitätsbewußtseins schärfer in sAuge zu fassen. (35)

(3) キリスト教信仰にとって神話とは何か

6. 「非神話的な意識というようなものが存在しうるか」

S. Ashina

「歴史的現実と、神話を作り出すところの人間精神の構造」

ob es ein schlechthin *unmythisches* Bewußtsein geben kann, (229)
 durch gleichzeitiges Schauen auf die geschichtliche Wirklichkeit und auf die Struktur des
 menschlichen Geistes, der den M. schafft. (229)

7. 「破られた神話」 der *gebrochene M.*

「神的なものを空間と時間のなかへもちきたらし、人間の形姿にかたどって客体化する行為」

「神話の克服」、預言者的、神秘主義的、哲学的

神話は克服されるが、神話の実質は残されている。

「神的なものの無制約的超越についての意識によって破られた神話」、「神話が破られている場合には、神話的なものはあらゆる宗教の一要素」

Die im M. enthaltene Vergegenständlichung des Göttlichen in Raum, Zeit und Menschenbildlichkeit wird von der prophetischen Frömmigkeit bekämpft, von der mystischen überboten, von der philosophischen als unwürdig und widersinnig dargetan.

Das Göttliche ist erfaßt als das Unbedingte, Seins-Jenseitige; es geht nicht ein in Raum und Zeit. Aber es ist nur anschaulich in Symbolen, die raum-zeitlichen Charakter haben. Der M. ist überwunden, aber die mythische Substanz ist geblieben.

Vom Standpunkt des gebrochenen M. aus ist das Mythische ein Element aller Religion, ist *M. religiöse Kategorie*. (231)

↓

神話という表現形態にそれにふさわしい位置を与えること。宗教的象徴自体（その対象的形態）と宗教的象徴が指示する実在との区別に基づく、宗教的象徴体系としての神話の存在意義の正当な評価。

<参考文献>

1. 芦名定道「改訂版 パウル・ティリッヒと象徴の問題」
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub3x.pdf>
2. Paul Tillich, *Mythus und Mythologie*, in: MW. pp.229-236.
3. 鐙木政彦「ティリッヒとカッシーラー——宗教の臨界をめぐって」、『日本の神学』（日本基督教学会）49、2010年、114-132頁。
4. ブルトマン『ブルトマン著作集』第11、12、13、14巻、新教出版社。
 神学論文集 I、II、III、IV。
5. クルト・ヒュブナー『神話の真理』法政大学出版会。
6. 松村一男『神話思考 I 自然と人間』言叢社。

<2 コリント>

5:5 わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。6 それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。7 目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。8 わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。9 だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。10 なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。11 主に対する畏れを知っているわたしたちは、人々の説得に努めます。わたしたちは、神にはありのままに知られています。わたしは、あなたがたの良心にもありのままに知られたいと思います。12 わたしたちは、あなたがたにもう一度自己推薦をしようというのではありません。ただ、内面ではなく、外面を誇っている人々に応じられるように、わたしたちのことを誇る機会をあなたがたに提供しているのです。13 わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。14 なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだこととなります。15 その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

<ヨハネ>

2:23 イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。24 しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、25 人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。

<ブルトマン>

A. Glauben und Verstehen 1**1. 「神を語ることは何を意味するか」(1925)**

「～に関して語ることは、常に、語られるものの外にある立場を前提とする。しかし、神の外の立場は存在しえず、それゆえまた、語り手の具体的・実存的状況とのかかわりなしに真であるような一般的命題・一般的真理として神を語ることはありえない。 34

われわれが通常語る現実(Wirklichkeit)とは、ルネッサンスと啓蒙主義以来、ギリシアの学問の基礎にある世界像(Weltbild)の影響を受けてわれわれの思考を支配している世界像のことである。われわれは、この世界の統一的連関の中で理解しうるものを現実的と思なす。 39

この世界像は、われわれ自身の実存から目をさらしてところで立案されている。そこでは、われわれ自身は、諸々の客体の中の一つの客体と見なされ、われわれの本来の実存への問いから目をさらして獲得されたこの世界像の連関の中へくみこまれる。人間を加えて完成させた世界像を人は通常、世界観(Weltanschauung)と呼ぶ。 39

ここでは、人間と同様に神も、外から客体として見られているからである。法則という思想によって構成される近代的世界像は、世界法則を神の働きの力と形式と考えるとしても、あるいは、神をこの法則性の根源と見なすとしても、神なき世界像である。神の働きを一般的出来事と見なすわけにはいかない。 40

信仰において、われわれの実存理解が問題になっているとすれば、そしてわれわれの実存は、神に基礎をおいており、神の外にあるのではないとすれば、われわれの実存理解は神理解を意味することになるからである。しかし、神は一般法則や原理や所与ではないのであるから、われわれが神を理解しうるのは、明らかに神がわれわれに対して行うことにおいてのみである。われわれは、自分に向けられた神の言葉、自分に向けられた神の行為を語る限りでのみ、神を語りうるのである。 45

2. 「パウロ神学に対する歴史的イエスの意義」(1929)

このように「知ること」は、キリストを「肉による」キリストすなわち目の前の世界現象として見ているという意味でそうであると同時に、それがまさに「肉によって知ること」、肉的な理解であり、世界内の目の前にあるものを考慮に入れているのすぎないという意味でもそうなのである。 233

3. 「新約聖書のキリスト論」

研究が新約聖書の教説を世界についての近代的学問を尺度として単純にはかる時には、その教説は神話論として現れる。したがって、新約聖書キリスト論の史的探求は、同時にその破壊を意味する。

こうした発展は、人間の救済者なる神をめぐってユダヤ教や異教のうちに以前から存在していた神話論的思想がイエスへ転用されることによって、すみやかに実現した。

これらの諸表象はすべて新しいものではなく、古い神話論に、古い希望や夢に由来するものであった。 280

その破壊作業によって、信仰が目を向けるべきナザレのイエスの歴史的形姿にいたる通路が開かれてと思われた。イエスに関する教説の本来の意味が今はじめて明らかになると思われたのである。その意味は、教説の神話論的表象内容のうちには決して存しない。

281

そうであるとすれば、キリスト論とは何であろうか。実践的敬虔の理論的指数ではないし、また、キリストに神的本質についての思弁や教説でもない。それは宣教

(Verkuendigung)であり、語りかけ(Anrede)である。 293

パウロのキリスト論は、キリストにおいて生じた神の救済行為の宣教に他ならない。キリスト論は神の言葉である。その言葉に対応するのが信仰者の新しい自己理解である。

294

パウロの義認論が、彼本来のキリスト論であると言えよう。 295

パウロの研究が認識した神話論的表象は、それとどのように関係するのか。救いの生起とキリスト教の実存の神学的説明はすべて、同時代の概念性の中でなし遂げられる。その説明は、常に人間とその世界について語ることでもあるから、伝統的な人間学的・宇宙論的概念の中を動く。そのような概念は時の流れに沿って変化するので、パウロも神学やキリスト論も、批判ぬきでは理解されない。

4. 「新約聖書における神の言葉の概念」

説教は聴くものの良心に向けられる

真の語りかけは、人間に自己を示し、自己自身を理解することを教える唯一の言葉であるが、人間についての理論的教えではなく、語りかけの生起が、実存的自己理解の状況を、実際にとらえるべき自己理解の可能性を人間に開くのである。語りかけは、あれこれを任意に選択させるのではなく、決断を迫る。

316

説教は信仰を要求する。

317

いずれにしても、旧約聖書との対比で新約聖書に特徴的な思想は、人間と神との関係がイエスの人格と結びついているという思想である。これは神話論であろうか。形而上学的意味での神子性、処女降誕、先在、最後のらっぱの響きと共に雲に乗ってくる再臨などの諸表象は、確かに神話論である。しかし、神がキリストの十字架を通してこの世にゆるしを与えたという思想も、神話論として除去されて良いのであろうか。……除去されるべき神話論はどこまでであろうか。それはキリスト教信仰にとってどこまで本質的なのであろうか。……したがって、前述の批判的基準によれば、イエスの説教の一部も除去されるべきものとなる。……かくして、前述の批判的還元は必要であるとしても、そこではキリスト教固有のものも除去されてしまうことになる。……その後に残る宗教は、純化されたユダヤ教もしくはヒューマニズムである。

357-358

B.Glauben und Verstehen 2

1. 「新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解」(1940)

神の言葉、神の要求は、人間を孤独者に、単独者にする。人間は、彼がコスモス、すなわち宇宙へ編入されることによって完全を見いだすことはできない。また宇宙に編入されることと、また宇宙における自己に位置を認識したり、承認することによって平安を獲得するのではない。ギリシア的世界観、とくにストア派は、人間に、普遍的法則の一つの一つの事例として自己を理解するように教えるが、新約聖書は、神の眼前に立つ単独者として自己を理解するように教える。

これまでの叙述で意味されているのは、信仰は世界観ではないということである。 101

信仰は、あらゆる未来の先取りとして、人間の非世界化を意味し、終末論の実存への転換を意味する。 110

2. 「世界教会協議会のキリスト論的信仰告白」(1951/52)

もし、神の支配という概念が根源的に終末論的な神話論に属するのであれば、キリストの支配が問題であるようなごく初期の箇所における表象が非神話化されていることが、今や特徴的である。なぜならば、この、キリストの支配は現在のであり、そりわけそれは、

S. Ashina

私がすでに指示したあの箇所（1 コリ 15:23-28）で、現在していると考えられるからである。キリストの支配の時としては、ここでは、キリストの復活と彼の再臨の間の時が、したがって、そこにわれわれがおり、そこで説教が鳴り響く現在が理解されているのである。この基礎になっているのは、パウロでは、メシア的な中間領域という、後期ユダヤ教の、あの神話論的な表象である。そしてまさにこの神話論的な表象が実存史化されているのである。 336

C. Glauben und Verstehen 3**1. 「新約聖書における啓示の概念」(1929)**

史実のイエスを、すなわち肉によってキリストを問う

ますますこの出来事は、その本来に性格においては、この出来事が現在において、すなわちつねに私の現在において成就される出来事として理解される場合にのみ、理解されるのである。しかし、その現在化の仕方は説教であり、その上、この説教は、何か過去のものを伝えるとか、それを思い出させるという仕方で現在化するのではなく、呼びかけとして現在化する。 33

2. 「新約聖書による時の間の人間」(1952)

神話的な終末論の諸形式の内には、人間の实存の一定の理解が含まれており、まさに、「間」という逆説的表象の内には、人間の逆説的実存理解が述べられている。 56

3. 「キリスト教的希望と非神話化の問題」(1954)

両方の希望像がヘレニズム的グノーシス的希望像と同様に、ユダヤの希望像が一神話的な希望像であることは疑いのないことである。二つの世界像が、我々の住む地球の上方にある宇宙的空間の内部の一領域として、救いと光の彼岸的、神的世界を表している限り、これら二つの世界像は、神話的な古代の世界像と結びついている。

その思惟が学問によって規定されている現代の人間にとっては、この神話的な表象の仕方は縁遠いものとなった 111

新約聖書そのものにおいて始まった非神話化の方法 117

非神話化によって顕わにされた神話的希望像の意味は、それらの希望像が神の将来を人間の命の充実として語っているということである。 119

4. 「新約聖書における歴史と終末論」(1954)

キリストが終末論的出来事であるのは、過去の姿としてではなく、現在のキリストとしてなのである。 137

真のキリスト教的理解における終末論は歴史の未来的終末ではないのである 138

5. 「科学と実存」(1955)

われわれを取り巻く世界やわれわれの会う世界のもろもろの現象や、自然、歴史、人間、そして人間精神の方法論的研究を、われわれは科学と呼ぶ。

独特に人間的な生き方を実存と呼ぶ。

科学は、諸現象を認識しようとすることによって、諸現象を思惟の対象とし、諸現象を「対象化する」。 139

科学においては、対象化する思惟は首尾一貫しており、方法論的に形成されている。

140

客観化する思惟は、この思惟の対象が属している対象領域の連関からその対象を理解

する。

153

このことは、神学に対しては神についての主張は客観的主張としては可能ではないという洞察に結果することになる。

神については実存からのみ、おそれとおののきのうちに、感謝と信頼の内に語られ得るのみである。

神は、宇宙の連関内にその場所を持つような一存在ではない。

155

6. 「ルネ・マルレに問う」(1956)

非神話化という私の主張の基礎になっている動機

一方では、神話的世界像が現代の人間の思惟を指定している科学的世界像と一致しないという動機。他方では、新約聖書のケリュグマを現在の人間に、実存論的解釈によって理解させようとする解釈学的意図という動機。

226

神話的思惟と現代的思惟の対立を強調した際にいつも私は、両者の間に共通性が存することに、つまり両者共に客観化するような思惟であり、したがってある意味で神話的思惟は素朴であっても科学的な思惟と呼ばれうる点に共通性が存在することに、実際どんな疑いをもはさまなかったのである。

227

D.Glauben und Verstehen 4

1. 「非神話化の問題によせて」(1963)

非神話化について、私はそれを神話論的言表、もしくは文献をその現実的な意味内容に従って問う一つの解釈学的方法として理解する。

166

解釈者の実存の問題によって左右され、歴史においてそのつど顕在化する実存理解への問い：実存論的解釈

168

原始科学的な、したがって事物を客体化する思考は、事実すべての神話論に共通のものである。……我々の連関からすると、神話が問題となるのは、そこにおいて人間実存に関する何らかの理解が表現されている限りにおいてなのである。

神話論的思考はしかし、素朴な仕方で彼岸を此岸に対象化する。……非神話化の試みは、これに対して神話の本来的意図を貫徹させようとする。すなわち、人間の本来的現実について神話それ自体に語らせようとするのである。

173

神が客観的に確認されるこの世の現象でない以上、神の行為についてはただ、それとの邂逅をとおして生じる我々の実存について語るという仕方でのみ語りうるに過ぎない。神の行為についてのこうした話法を、我々は「類比的」と名付けよう。

174

2. 「イエス・キリストと神話論」(1958)

歴史の流れは神話論を否定している。神の国の表象は、終末のドラマの表象がそうであるように、神話論的だからである。

184

イエスの説教を始め、新約聖書全般にひとしく前提されている世界理解もすべて神話論的である。

天上界、地上界、冥界の三界層

185

原始キリスト教の当初から神話化されている。

今日の人間にとって、神話論的世界像、たとえば終末とか、救い主とか、救済といった表象は、とうの昔に過ぎ去った無用のものではないか。

186

知性の犠牲

我々はこうした終末論的説教と全体としての神話論的言表が、神話の覆いのもとに深い意味を秘めているかどうか、そのことについて問わねばならない。もしそうであるとす

S. Ashina

るならば、我々はまさにそのより深い意味を手にするために、神話論的諸表象を棄ててもよい。神話論的表象の背後に隠されたより深い意味の再発見をめざすような新約聖書の解釈法を、私は「非神話化」と名付ける。その目指すところは、神話論的叙述の削除ではなく、その解釈である。それは一つの解釈の方法なのである。

神話論は原始科学であり、 187

神話は超越的な現実に、内在的・此岸的客観性を付与する。神話は彼岸的なものを此岸的なものに客体化する。 188

非神話化において現代の世界観が一つの基準となっていることは確かである。しかし、非神話化するということは、聖書やキリスト教の使信を何から何まで放棄するのではなく、聖書の世界観を捨て去ることなのである。

聖書の古い世界観と現代の世界観との対比は、二つの思考様式、すなわち神話論的思考と自然科学的思考との対比でもある。科学的思考とその問題提起の方法は、古代ギリシアにおいて方法論的かつ批判的な自然学が開始された当時と根本においては今日もなお同じだと言えるだろう。 202

非神話化は逆に、神の神秘の真の意味をはじめて明らかにする。神の不可解性は論理的思考のレベルにではなく、個の実存のレベルに属する。信仰が問題とする神秘は、神とは何であるかではなく、神はいかなる仕方で人間に働きかけるかにある。これは論理的思考にとっての神秘ではなく、人間の自然の願望と欲望にとって神秘なのである。神の言葉は私の理解からすると神秘ではない。逆に、私はそれを理解することなしに本当の神の言葉は信じていることができないのである。 206

非神話化を一つの解釈、すなわち実存論的解釈と呼び、とくにマルティン・ハイデッガーが彼の実存分析で展開した概念を用いた 207

解釈の前提、あるいはテキストにふさわしい前提とは、人の現実にある事象（魂の生）に対して関係をもつということである。 生の連関 211

神への問いと、自己自身への問いとは同一である 213

正しい哲学とは何かという問い

いずれの哲学が人間実存を理解するために適切な展望と概念を与えているのか、という問い 215

神を行為する者として語ることが、神話論的であると言い張る人がいるとしたら、私は敢えて反論しない。なぜなら、このような意味の神話とは、非神話化の意味する神話とは全く異なるものだからである。我々が行為する神について語る場合、我々は神話論的に、つまり客体化の意味で語っているのではない。

信仰において、私は自然科学的な世界像が世界と人間生活のすべての現実を包括するものではないことを知るのである。だからといって信仰がそれに代わる、もう一つの世界観、すなわち自然科学のその自身の次元における表現を修正するような世界観を提供するものではないことも知る。 221

我々はどうしても普遍的な言葉を用いて語らずに、ここでいま我々に働きかける神の行為について語る場合にも、我々はどうしても普遍的な概念を借りて表現せざるを得ない。というのは、我々の言語はつねに概念を用いるからである。しかし、このことから、こうした問題が普遍的な性格をもつという結論には至らないのである。 223

神話論的語法に墮することなしに神の行為について語るができるかどうか。

信仰の言語が神話論的言語とならざるを得ないことを認めるとして、こうした事実が非神話化のプログラムに対していかなる影響を及ぼすかについて

神話論の言語が、信仰の言語として用いられる場合、神話論的意義は失われる。神話論的表象は、象徴あるいは比喩として用いられ得るのであり、それは宗教

のみならずキリスト教信仰の言語にとっても必要不可欠のものである。かくして、神話論的言語の使用は、決して非神話化に対する反証とならないばかりか、むしろ積極的に非神話化を要請するものであることが明らかになる。 223

たしかに、信仰の言語にこめられたそれらの意味が神話論的表象によって表現されねばならないということとはあり得ない。それらの意味は、神話論的用語を用いずに語られ得るし、また、そうでなければならない。 224

聖書の言葉が神の言葉であるという事実は客観的に立証できない。つまりそれは、ここでいま起こっている出来事なのである。……その邂逅は歴史的な生としての我々の生の実体なのである。 226

信仰は、人間の思考から生じるあらゆる世界観（神話論的であると科学的であるとを問わず）から解放されることを自らに要求する。すべての世界観は、世界を対象化し、我々の個の実存における邂逅の意味を看過したり、排除したりする。 235

神と神の行為を対象化しようとする誘惑

神が不可視的存在であるということは、神および神の行為を可視的にしようとするあらゆる神話を排除する。神は眺められることや観察されることを許さない。我々は良心の事実に逆らいつつ義認を受け入れるのと同様に、経験的事実に逆らって、神を信じるのである。非神話化は、パウロやルターの言う律法の業によらず、ただ信仰によってのみ義とされんとする教えとまったく平行した課題である。更に正確に言うならば、非神話化とは知識と思考の領域に、信仰による義認の教えを徹底的に適用することである。義認の教えと同様に、非神話化は確かさを求めるあらゆる要求を破壊する。 236

我々信仰者のこの世界に対する関係は逆説的である。 237